書　評

「ised　情報社会の倫理と設計」（河出書房新社）ライブ中継風の書評

ised Interdisciplinary Studies on Ethics and Design of Information Society Alive Review of the study seminar

緒方　修
人文学部国際コミュニケーション学科教授

要約：ised とは Interdisciplinary Studies on Ethics and Design of Information Society の略称。この本は倫理篇と設計篇に分かれており帯に以下のように紹介されている。倫理編は「新時代の情報社会の倫理とアーキテクトは、いつか必ずや現実の情報空間のただなかから立ち上がるだろう。」、設計編は「情報社会は夢の苗床である。多くのひとが情報社会に夢を託す。ised はそんな人々の様々な夢が、衝突しすれ違った文学的な場でもあった。」

2004 年から約 2 年間、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターで開催された研究会「情報社会の倫理と設計についての学際的研究」の議事録。2 冊合わせて 1000 ページに近い大著を研究会開催の順番通りに倫理篇と設計篇の 2 冊を交互にライブ中継風に読み解く。

Abstract

'ised' stands for Interdisciplinary Studies on Ethics and Design of Information Society. This book is consisted of two parts, Ethics and Design. The advertisement of this book introduces as follows. Ethics part shows "Ethics and Design of information society of coming new age will someday rise up from real information space." Design part says "Information society is bed of dreams. Many people place hope in this field. ised is the place where their dreams clashed over and hence we regard it as literary place."

This book is a record of seminar of 'Interdisciplinary Studies on Ethics and Design of Information Society'. held at Global Communication Center of United Nations University since 2004 for two years. Author gives detailed commentary on the record which has almost 1,000 pages. It gives us alive meeting of the seminar.

ised 情報社会の倫理と設計（倫理篇・設計篇）

東浩紀、濱野智史編（河出書房新社）

～倫理研・設計研の講演＆共同討議 15 ラウンド・ライブ中継～

ised とは Interdisciplinary Studies on Ethics and Design of Information Society の略称。2004 年から約２年間、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターで開催された研究会「情報社会の倫理と設計についての学際的研究」の議事録である。2 冊合わせて 1000 ページに近い大著。倫理篇と設計篇に分かれている。議論は倫理研の 1 回目の後、設計研という具合に各７回ずつ計 14 回行われた。それぞれの研究会は基調講演とそれに続く 2 回の討議より成る。新書版にすれば５～７冊分にも当たる分量だ。研究会の行われた順序に従って倫理篇・設計篇とまとめて一回ずつ、2 冊の本を交互に読み解いてみたい。

倫理研第一回の講演は、社会学者の鈴木謙介による「情報社会の倫理と民主主義の精神」。注目すべきは、サイバーカスケードがもたらすポピュリズムという項だ。「小さな小川やせせらぎも、滝壺に落ちる時には濁流に変貌してしまう」状態。アメリカの憲法学者キャス・サンスティーンは、ネット上の言説が集まって、こうした狭隘な視野に囚われてしまわないかと危惧している。一方、これをポジティヴにとらえる見方もある。韓国やインドネシアでインターネットや携帯電話による有権者の集合行動が、政権打倒に至った例。既存のメディアでは成しえない情報共有と社会的ネットワークの形成を「創発的秩序」と呼んで、積極的に評価する潮流もある。注には―「創発（emergence）とはシステム理論や複雑系の用語で、システムを形成している個々の要素では見られない性質が、システム全体の振る舞いにおいて発現（emerge）することを指す。（略）もともとの発想は、生命には「要素還元主義」では説明することのできない特有の力（生気）が存在すると見なす 19 世紀ドイツの「生気論」にまで遡る。―とある。生気論についてはハンス・ドリューシュという 20 世紀初頭の生物学者が「生気論の歴史と理論」（書籍工房早山・米本昌平訳）を著している。養老孟司の評によれば、「当時の生物学には情報という概念はなかった」。

ドリューシュは、物質でもないエネルギーでもないエンテレキーという奇天烈な概念を発明した。当時の事情ではやむをえなかった。現在では生命・生物の歴史も情報や編集という言葉で語られる。

脇道へ逸れたが、この後の共同討議では「２ちゃんねる」の問題などが議題に上った。「繋がりの社会性」と「脱社会的存在」という項では―日本でのメールのやりとりは、メッセージの交換というより「繋がっている」という事態そのものの確保に使われていて、なかなか創発的事態を生み出さない―と指摘されている。

設計研の 1 回目では、「道具」と「場」という二つの設計が提示され、「設計者の場」という耳慣れない言葉が登場する。「インターネット技術は多くの技術者がアイデアを持ち寄り、提案を戦わせて作られた一つの技術体系」であり、ラフコンセンサスの下にともかくやってきた。「伽藍とバザール」という有名な例えがあるが、インターネットは伽藍のような大建築物として設計され発展してきた訳ではない。バザールのように小さな店が集まった市場と人々（技術者達）が絶えず触れ合いながら成長してきたのだ。

倫理研 2 回目の講演は法学者の白田秀彰による「情報時代の保守主義と法律家の役割」。

氏は、法 law ＝実行されている状態、あるいは諸力の調和状態。法律 code ＝何らかの主体によって実行が強制される可能性のある人の行為に関する「取り決め」。法を強制するものが「権力 power」。権力は最終的に国家に帰属する。と定義する。

これまでの法は閉じられた体系であった。地理的には近くに住む集団が集合的な世界観である常識を形成している、これが下部構造となって上部構造である法や法律、規範が動作している、と考えられる。つま

り大地と身体に基づいた現実の世界であった。ところが現代の情報技術は法を揺さぶっている。それは「常識形成のフィードバック・サーキットが開放回路に変わってしまうからだ」。

続いて行われた共同討議のタイトルは「情報社会の法と正義」。情報社会は人を自由にするのか、管理する方向に向かうのか？ポストモダン社会では社会が二つの領域に分けられ、そして情報技術は相反する自由と管理の双方を強化する、という考えが示される。規律訓練型権力と環境管理型権力のバランスが変わり、後者の比重が増大しているとの指摘がある。―「規律訓練 discipline」型の権力とは、価値観やイデオロギーといった内面的な部分を通じ、ある特定の行動を主体的に選択する個人を作り上げていく権力。（略）「環境管理」型の権力とは、そのような内面を必要とせず、ある特定の行動以外が不可能になってしまうように社会環境を整えることで、人間を身体的かつ無意識に（略）コントロールする権力。―

設計研２回目の講演は有名なハッカーアクティヴィスト八田真行による「オープンソースの構造と力」。八田は、オープンソースに対する一般のイメージ（プログラムの設計図が公開されている、無料で使うことが出来るなど）は不正確だ、として次のように定義する。―あまり関係ないとされている二つのものが混合しているイメージ。（略）一つはプログラムという著作物の法的状態としての＜オープンソース＞。そしてもう一つは、著作物の開発形態としての「バザール型開発モデル」―そして前者の構造が後者の「バザール型開発」という集合行動における力を間接的に規定しているのではないか、と説く。「＜オープンソース＞という法的状態はある種のアーキテクチャ＝環境管理型権力として考えられるのではないか」。そして、分かりやすい例としてマクドナルドの堅い椅子が挙げられている。長居出来ないようにしてお客の回転を上げるやり方だ。「２時間以上の滞在はご遠慮ください」などの案内があれば反発が起きるだろう。しかし座り心地の悪い椅子では、何も言われずともお客は食事を終えたらさっさと出てゆく。

第二部の共同討議では、「ソフトウェアの設計と制度設計は違うのではないか」、「オープンソースとは生産プロセスの革命だと思う」、「オープンソース的なモチベーション連鎖はミクロな開発現場では使えるけれど、よりマクロな部分、例えば開発者と社会とのインターフェースになるとオープンソースのモデルはあまり機能しない」、などの意見が出された。

ここで印象的だったのは、オープンソースと似たものが企業の現場でも出始めている、という発言だ。ユーザーに情報を開示し、ユーザーからも知恵をもらう、という現象。

紹介が遅れたが倫理篇の帯にはこうある。「人文的知性によって分析されるネットワーク・公共性・匿名性―圧倒的ヴォリュームで語られる、現在性の精髄！　氾濫する＜情報＞についての根源的思考」

設計篇には「工学的知性によって描かれる自由・多様性・民主主義―来るべき社会を構築するためのヴィジョンがここに！　アーキテクチャが想像する＜社会＞とは何か」。

倫理篇、設計篇、共に 10 人以上のメンバーが集い、共同討議を 14 回繰りかえした。まとまった本は細かい字で２段組み、上下で 970 ページに及ぶ「思想書」だ。

倫理研の３回目は社会学者の北田暁浩による「ディスクルス（倫理）の構造転換」。

始めの部分を要約する。「インターネット上の価値形成のメカニズム」などの議論を、機能論的に整理し、政治哲学的／規範論的な問いへと送り返したい。機能論とは様々な立場を「価値に基づく共同性、関係性の構想」としてではなく「複雑性を縮減するメカニズム」として考える。叩き台としてユルゲン・ハーバーマスの「公共圏」概念が据えられる。

ここでは北田の二つの指摘のみ紹介する。「ジャーナリズムの核心のように言われる不偏不党は、その『頽廃』とともに成長してきた』、（放送ジャーナリズム自身が）「新規参入を阻み、マスメディアの言説の希少性を確保するために『公正中立』が流用されているのではないか」。新聞も放送も限られた空間を少数で独

占しておきながら、ジャーナリストの社会的使命とか責任とか言っているのは思い上りではないか。北田の「公共圏」論から私がここだけ着目したのは、強引で雑過ぎるのだが、共感しながら読んだ。

続いての討議では、中央集権型のマスメディアと分散型のCMC（Computer Mediated Communication コンピュータが媒介するコミュニケーション）とは根本的に違う、だからインターネットのユーザーがバカだから「公共圏」（public sphere）が成立しないということではない、と念押しがあった。そして次のような危機感が表明される。本当に問題とすべきはむしろ「私圏」（private sphere）が不可能になっているのではないか、CMCの世界では誰でもいつでも覗ける、つまり私的空間が公的空間に飲み込まれてしまう。「２ちゃんねる」で実際に起きた次のような例は対処不可能だろう。―いままでは中学生が教室の中で「爆破予告」や「犯罪予告」をしても先生のゲンコツで済んでいた、ところが、「いまや社会全体としてこうした行為を監視せざるをえなくなっている。」

設計研の３回目はMicrosoft社の楠正憲による「制度間競争としてのプラットフォーム形成と、情報社会のガバナンス」

情報社会では市場任せにしておいてよいのか、市場だけでフィードバックを回せるのか、と提起。さらに、設計者は不在である、設計というのは標準競争の場が複雑に絡み合っており、能動側と受動側とに明確に分かれている訳ではない、と強調した。

経産省の現役官僚である村上敬亮は、かつての通産省の例を引きながらこうコメントしている。「あるべき産業構造を特定し資源の再配分や技術開発に取り組んできたからに過ぎず、自分たちがゼロから設計したという立派な話ではない」。そして産業界（サプライサイド）からのイノベーションが見えにくくなっている、と述べた。

倫理研４回目の講演は加野瀬未友の「個人サイトを中心としたネットにおける情報流通モデル」。加野瀬は著名なブログ「ARTIFACT」を運営するブロガー。

「２ちゃんねる」やブログの発展の経緯、現状説明の後、「炎上」「荒れる」のメカニズム、さらにネットリンチなどにふれた。「ネットは何かを止めることに関しては強力です」という言葉が印象に残る。ネットが、ネガティブに働く強力なツールになってしまったのは、足を引っ張るのが得意な国民性からだろうか、と思いたくなる。

続いての共同討議では「ネットは開かれてはいるけれど公的な場ではなく、遊技場化されつつある。これを「総ネタ化」と呼んでおきたい」。さらに「いまの日本には、誰かの悪口を一緒に言い合うことで、友人を見つけたいという人が膨大な数いるのです（笑）」とくくられている。どうもネットが不満のはけ口となっている例ばかり目立つ。

ところが設計篇４回目では議論のトーンがガラリと変わる。講演は慶応大学SFCの井庭崇による「自己革新的な社会に向けての教育とメディア―コミュニケーションの連鎖によって『作る』ということ」。

井庭の主張は「シミュレーションは、コミュニケーションのための新しいメディアになる」。世の中には大小様々なイノベーションが遍在している。「小さなイノベーションをうまく拾い上げ、連鎖と共鳴を起こせれば、さらに新しいモノや考え方を作っていける。」

井庭は教育現場で「動くプロトタイプ（試作品）」を作り、シミュレーション・ツールをプラットフォーム化している。これを基盤にしてコラボレーションによる思考のインフラに育てる考えだ。

共同討議の司会は哲学者・小説家の東浩紀から「天才プログラマー／スーパークリエイター」の鈴木健に変わる。鈴木は10年～20年のスパンで話をしよう、と提案。アラン・ケイの「すべての人がメディアを作る」を引用しながら議論の時間・空間・テーマのスケールを一挙に拡大した。発言者にまわった東が

発明（invention）と改革（innovation）の違いに着目、前者の語源は in + venire(来る)、後者は in + novus(新しい)。全然違うものだと指摘する。さらに情報技術は人間と自然を繋ぐものではなく、人間と人間を繋ぐものとしか考えられていない、これは何故かと問う。Microsoft 社の楠は、発明は金も時間もかかる。「一番のドライビング・フォースはやはり軍事の世界です。」と身も蓋もないことを言い、さらに「ロボティクス、サイバネティクス、そしてインターネット、すべて軍事発なんですね」と付け加える。冷戦終結で米ソ双方が軍事技術開発の方向を変えた→発明が起きにくくなった、ということなのだろうか。東が再び発言。30 年くらい前の未来予測では超音速旅客機がニューヨーク・東京を 3 時間で結ぶはずだった。「そのような未来観が崩れた最も大きな原因は環境問題ですね。」そして「私たちには未来と生態系を両立させる技術がなかった」と反省する。かなり文明論的な座談会に発展してきた。最後に、社会の設計（design）をする、と言いながら、なぜ設計研では議論がインフォーメーションだけにフォーカスしているのか、と疑問が出された。またもや楠が簡潔に応えている。「ROI（投資利益率）が高くて市場が拡大しているから」しかしそれは「もう止まる」とも予言している。

「倫理篇」、「設計篇」の 2 冊の本を研究会開催の順序に従って交互に 5 回ずつ、合計 10 回分を読み進めてきた。これまでで 665 ページ。最初は固かった議論が次第に共通項がはっきりし、視野が広がってゆく。2 冊を別々に読むよりは、議論の展開を時間の経過とともに追いながらこちらも次第に理解を深める方が良い。

倫理研 5 回目の講演はセキュリティ研究家の高木浩光―産業技術総合研究所研究員―による「蔓延（はびこ）るダメアーキテクチャ」。

「無断リンク禁止教」の項では、役所やマスコミが勝手にリンク禁止を言い渡し、小中学校の教育までがそうなっている、と憤慨している。公的リンクに制限があってはならない。県庁や市役所は市民に知らせるのが義務なのだから。高木によれば「無断リンクを好まないのであれば、直接リンクが技術的にできないようなアーキテクチャを作り、私的な範囲でコミュニケーションをしたい人の領域は侵さないようにする」。こうした棲み分けが解決策だ、と主張する。後半では政府の旗振りによって進行中の RFID（Radio Frequency Identification）タグの危険性に警鐘を鳴らす。このチップでは暗号が簡単に破られ電波が再現されてしまう。「さらに胡散臭いのは『安心・安全』というキーワードです。この標語の下に国が RFID を推進している」！ダメ政府のダメ政策の延長が、ビッグブラザーの世界（「1984 年」- ジョージ・オーウェル）になってはたまらない。続いての共同討議では「個人情報を提供しなければ社会生活を送れないような社会になりつつある」と指摘があった。

設計研の第 5 回講演は株式会社はてな代表取締役の近藤淳也による「なめらかな会社」。いま一番に取り組んでいるのが、社内における社員と社員、会社とその外側（ユーザー）、日本と世界、このそれぞれ三つの境界を「情報共有によって」なめらかにすること。毎朝のミーティングも「必要な部分だけ参加する」とユニークだ。会議の音声ファイルをウェブ上で約 1000 人が聞くという。社員は約 10 人だが、こうしたユーザーに支えられている。

仮想のアイデア・ポイントを使って株式を購入したり取り引きする予測市場が注目だ。これは利用者 VS 提供者という対立軸ではなく「視点の共通化」をもたらした。「自分はこれをやってほしい」ではなく「はてながこれをやりそうかどうか」を予測して価格付けをする。「全体の動向を意識したメカニズムが働くために、最終的な予測精度が上がる」と分析している。「貢献消費者」は、はてなユーザー約 30 万人のうち 3000 人、1%以下らしい。

共同討議では、小組織だからこそ、はてなはうまく行っているのではないか、という疑問も出された。「なめらかな会社というのは、実は小さな組織のことではないか」、「むしろクォリティアシュランスは大企業の

方が有利」などの指摘も。

また、はてなダイアリーの仕組みが賞賛された。「ダイアリーを読みたいという欲望とキーワードを読みたいという欲望はまったく別物（略）。しかしはてなではその両者が結ばれている。それがはてなのすばらしいところだ」。社長の近藤は言う。「自分が日々の出来事を気ままに書いているだけで、普段は関係ない人への価値が作られていくという装置。これを思いついたので、サービス開始に踏み切った。」公共空間を構築する、という大層な目的ではない。楽しい仕組みをつくりたい、というところから出発したのだ。

倫理研６回目の講演は社会学者・辻大介による「開かれた社会へ向けて存在の匿名性を擁護する」。

前回（５回め）の倫理研では、管理社会はしょうがない、という論調で終わった。それは東の「情報過多によって認知限界が到来することで、存在の匿名性は擁護できないのではないか」という発言にも表れている。辻の議論を整理すれば、次のようになる。「個人情報の管理に関して、人間は一切関与せず機械に任せた方が良い、という議論がある。非人格的であるのでビッグブラザーというよりビッグイット、と呼んだ方が良い。一方、リトルブラザーならぬリトルイットが複数存在し、そこに限られた範囲の個人情報（振る舞い）を知られることはクリティカルな問題ではない。プライバシーはそもそも right to be let alone（放っておいてもらう権利）として19世紀のアメリカに生まれた。原点に立ち戻るべきではないか」。共同討議において、辻は次のように質問に答えている。―ビッグイットはハイパー住基ネットみたいなもので、amazon はそこまで行かない。―

現代国家の司法・立法・行政のうち、行政は機械任せにすれば「法の完全実行」も可能である、という議論も出た。

設計研６回目の講演は経済産業省の現役官僚・村上敬亮による「縦の社会を横に繋げる―なめらかな国家の『設計』をめざして」。

以下、要約する。日本はこれまで縦割り産業で発展してきたが行き詰まった。「もはや企業内や系列などで縦割りを残したままビジネスをしようとしても顧客の要請にはついてゆけない」。これを横に突き刺すアプローチとして EA（Enterprise Architecture）活動がある。家電業界を例にとれば、IT 投資を進めようとしても事業部ごとにバラバラのシステム、設計書、フォーマットでうまくいかない。設計は下請けに任せたので設計書が残っていない、という事例もあった。創造的再構築に必要なのは１－働くことが楽しいアルチザン的非アルチザン。２－社会的プラットフォームの再構築。３－産業経済を支えてきた「ものの品質」の論理から、情報経済を支える「プロセスへの信頼」への論理。

東から、設計研の議論をもう少し深められないか、と注文が出される。―これまでの議論は「情報社会の設計」ではなく、「組織の設計」に留まっているのではないか？、では目的は？、市場が用意してくれる、と片付けるのではなく再配分（富と知）の話をしっかり進めるべきだ。コミュニケーションの革命は新しい価値を生み出すのか？、文明社会は自然環境という巨大なインフラに乗っているが、この二層構造を変えることが出来るのか？、何度も何度も再定義して先に進むような近代社会的なダイナミズムを、民主主義 2.0 は確保できるのか？。集団作業を支援するプラットフォームがいろいろ提案されたが、固有名の機能はどうなるのか？―これは３回目に出た「設計者不在」に関わる。すでに普及してしまったデファクトのスタンダードなどに対する批判意識を喚起するには固有名が必要だという論だ。注によれば「固有名はそうであったかもしれない複数の記憶を宿しており、「そうではなかったかもしれない可能性」を呼び起こすという機能がある」。

これで約 800 ページを越した。あと約 170 ページ。最後のラウンドのゴングが鳴った。

倫理研７回目の講演は弁護士の小倉秀夫による「プラグマティックに匿名／顕名を考える」。

小倉の論旨はこうだ。前提として、IT 革命のおかげで自由に言論が飛び交うようになった、しかし参入障壁の崩壊と「表現の自由」とは直接関係ない。もう一つ、「表現の匿名性」という場合、「匿名表現の自由」と「表現の匿名性の保障」という概念に分かれる。後者は例えば北朝鮮で金正日批判をすることは危険が伴う、表現者が特定されると「社会的制裁」を受ける、内部告発で私的制裁を受ける、の３例を考えれば分かる。（ネット上の誹謗中傷を避けるには）「共通 ID 制度」を設け、個人情報の登録・保管は民間の専門業者に任せれば良い。

共同討議では「むしろ法改正こそが必要なのでしょう。ネットを現実社会のサブシステムにしたいわけですから」、「小倉さんの話は言論の自由の話ではなく、むしろ騒音問題に近い（笑）」と指摘されている。ネット上の言論の質の低さについては全員が辟易しているようだ。「日本のコミュニケーション空間では、『２ちゃんねる』的な嗤う雰囲気や空気を読む作法が主流であって、内容に関する議論は成立しない」、「つまるところ、空気によって駆動され、ハイテクノロジーによって管理された、世界でも稀にみる滑稽な国ができつつあるということでしょうか。」あーなんという暗い結末。

設計研７回目は「天才プログラマー／スーパークリエイター」の鈴木健による「なめらかな社会の距離設計」。

キーワードは「距離」。物理的・経済的・文化的距離だ。この距離の感覚をどうして変えてゆけるのかがテーマ。「われわれはあらゆるものを内と外に切り分けている。鈴木によればこれは「なめらかでない概念」だ。彼が開発してきた「PICSY」（Propagational Investment Currency System 伝播投資貨幣システム）という「なめらかな」貨幣を紹介しよう。PICSY の考える公平さは、「貢献度に応じて購買力を与える」。対立する概念は「SECSY(Settlement Currency System 決済貨幣)。前者は関係を作り、後者は貸借関係を解消する、つまり関係を切ることにつながる。例えば悪い医者は患者を入院させ薬漬けにして儲かる、良い医者は患者を早く治して病院経営が危うくなる。これは不公正だ。PICSY では、患者の収入が医者に伝播して戻ってくる仕組みだ。社会全体への貢献度を計算し、次に貢献度に応じて購買力を与える。ちなみに、これは行列計算という手法で可能らしい。最終的な目標は２～300 年かけて国家通貨・国際通貨として採用されることだ、という。さらになめらかな社会契約についてもふれている。

共同討議では「既存の社会は、コミュニケーションなり権力関係なりを単一の媒介に集中させる状態にある。これを解体しようというのが、鈴木さんの提案の基調低音」と評価された。「なめらか教」という宗教にほかならない、という指摘もあった。それは悪い意味ではない。仏教的世界観は、他人に善いことをすれば自分にも戻ってくる、つまり因果応報を説いている。しかし現実にはそうはなっていない。そこで鈴木が、思いやりや愛で実現しなかった社会制度を、いま一度実現しようとしているのではないか。この本を読んでいる我々は、新しい歴史の誕生に立ち会っているのかもしれない。

倫理研、設計研ともに７回ずつの議論で終わり、と思っていた。ところがボーナストラックとしてまだ座談会が続いている。ised の終了から４年が経った。2010 年の時点から見て当時の議論がどのように見えるのか。文字通り 15 回めの最後のラウンドだ。前半は倫理篇に、後半は設計篇に掲載されている。私のこれまでの読み進め方で正しかったのだ。

「ポスト ised、変化したことは何か１、２」の座談会参加メンバーは倫理研・司会の東浩紀、後半設計研・司会を務めた鈴木健、濱野智史、津田大介、藤村龍至の５人。

東は「僕は、情報系、オタク系、現代思想系の三つ、最近では文学が四つ目として入ってきたりする」マルチタレント。鈴木は「僕一人だけテンションが高くて（笑）、僕はなんとか他の人を巻き込もうとして司会までやっちゃったみたいな」青年。濱野は ised 全体の裏方でこの本の共同編者。「振り返れと言われても、

ただ辛かったということくらいしか覚えてないんです（笑）。三日三晩寝ないで議事録作ってたなあ、とか飲み会を朝までやってたなあ、とかそういう記憶ぐらいしかなくて、いまと変わっていないといえば変わってない（笑）」。津田は初登場。東の紹介によれば「知的財産権の問題に詳しく、最近ではツィッターとして有名な（笑）」メディアジャーナリスト。藤村も初登場。「『思想地図』にご執筆いただき、『批判的工学主義』の提唱で知られる」建築家。

文中の発言を引きながら登場人物を紹介した。全編を通して真剣な議論の中に笑いが絶えない。東のまとめ役としての力量がうかがえる。専門の違った同士を集めて議論を重ね、必ずその後は**飲み会**。そう、それなしになんのおのれが桜かな（？）、それにつけても金のほしさよ、なのである。知的バンカラというか、蛮勇を奮って委員を集め、研究会を開き、**懇親会**を続けた。東によれば「そうなんだよね。実はそれこそがised がある程度成功した秘訣だと。ここはぜひ太字で強調してほしい（笑）」。

例えば、出張して研究会や会議に２時間出席、そのままとんぼ帰りでは何も生まれない。イノベーションには、飲みにケーションが欠かせない。これは緒方の持論だが、驚くべきことにこの締めくくりの座談会でも同じことが主張されている。

東「つまりは、強引に結論を出すと、話す人間としてのヨーロッパ人、自分で自分を守る人間としてのアメリカ人に対して、日本人は「『空気を読んで酒を飲む人間』であると。したがってこの国では、そんな人間像をエンパワーするためにIT 技術を使っていくべきなのだから、Twitter や USTREAM による飲み会中継は絶対的に正義なのだと―ええと、本当にこれが結論でいいのですか（笑）」。

この研究会が始まったのが６年前。ドッグイヤーで数えると６年×７＝48 年も昔の議論ということになる。ipad　もキンドルも登場していない時代。しかし情報社会の行方を探るうえで必読の本と言って良い。ここで取り上げられた議題は射程が長く、原理的な考察がなされている。この読書メモは「ライブ中継」と名付けた。読者には、リングサイドで観戦しているような気分を味わってほしかったのだ。だが中継アナウンサーの非力で、試合の流れを見誤ったり見落としている箇所が随所にあるに違いない。見る者の視力に応じてしかものは見えない、と気が付いたがもう遅い。ご容赦を。（文責・緒方）